

Title	風の如く来たり、風の如く去る
Sub Title	Hie esse et illic simul potest
Author	若林, 真(Wakabayashi, Shin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.1- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 風の如く来たり、風の如く去る

若 林 真

松原秀一教授が今年度を以て慶応義塾を退職するという。実際の定年の年齢まで二年を残しての退職であり、本来ならば私といっしょに退職するはずだったのだ。まことに残念というほかはないが、パリ高等実習学院第四部門で一年間教えるためだそうであるから、学究松原にとっては慶賀すべきことに違いない。それに、幼稚舎入学以来ゆうに半世紀以上も過ごした慶応義塾から、去りぎわに、東西文化交流の研究業績に対して、栄えある義塾賞を授けられたのだから、ご当人もさぞかし本懐であろう。

正直に申して、私と松原さんほど対象的な個性も珍しいと思う。彼は都心の麻布で育ち、東洋英和幼稚園から慶応義塾幼稚舎に進み、その後普通部、経済学部を経て、仏文科の大学院へと進んだ。父君は外交官で仏語学者でもあった故松原秀治氏である。根っからの良家の坊ちゃんなのだ。おまけに、学生時代にはワグネル・ソサイアティーに属し、合唱団の指揮棒も振ればピアノもオルガンもヴァイオリンも弾く。特にピアノにいたっては玄人はだしの腕前だそうだ。

それに比してこの私はいえ、彼より約一年早く佐渡が島に生まれ、同地の小学校、中学校に学び、昭和二三年に慶応義塾大学文学部予科に入学して初めて東京を知ったような、典型的な地方出身の貧乏学生である。おまけに、学生時代の私は毎月の文芸雑誌や文芸書を読み漁ることしか能のない文学青年で、フランス文学の勉強のかたわらひそかに創作も志していた。実をいって、「三田文学」に小説を書いたのは、安岡章太郎さんや遠藤周作さんより私のほうが早かったのである。

このような水と油の如き二人が、どんな運命のいたずらか仏文科教員として同じ釜の飯を食うこととなった。爾来三五年余、いろんな感情的軋轢を経験しながらも、まあまあつつがなく時を過ごすことができたのは、ありがたき幸せである。

いま私の机上に松原さんの著書がのっかっている。すなわち、『ことばの背景』と『危ない話』二冊の、単語から見たフランス文化史、説話の系譜を辿りながら東西文化の接点を探った『中世の説話』、キリスト教にまつわるさまざまなエピソードを考証した『異教としてのキリスト教』などの著書である。

これらの著書の誰の眼にも明らかかな特徴は、松原秀一の驚くべき博識である。何事にもひとしなみに好奇心を持ち、博覧強記の人でなければ、ありえない業である。むろん私に不満がないわけではない。彼の著書は知識欲と好奇心のおもむくままに、折々に綴られたものであるけれど、ひとつの論考からもうひとつの論考への移動が、どのような内的動機にもとづくものなのか、かならずしも判然としないことである。語弊があるかもしれないが、彼には知識へのフェティシズムのようなものがあり、比喩的に申せば、糸巻きに実に多彩な色彩の知識の糸を巻きつける。白の糸の次にいきなり赤の糸が、その次には緑の糸が突如として巻きつけられる。その関心の推移の力点がなかなか余人にはつかめない

のである。三田山上では、松原秀一教授といえは居所のつきとめにくい人物として名高い。あまり広くないキャンパスをひとつの場所に風の如く現れ、瞬時にしてまた別の場所へ風の如く去ってゆく。A地点からB地点への移動の論理的必然性が凡人には理解できないから、彼の所在の補捉が困難になるのだ。

松原秀一さんのこのような変幻自在さに、かつて私は度肝を抜かれた経験がある。かれこれ十五六年も昔のことであろうか。ある年の夏の終わりに、作家の古井由吉さんと文芸春秋勤務の友人と三人で、信州白馬の私の山小屋にいた。宵闇が迫ったころ、われわれは近くの飯屋へ出掛けた。一杯ひっかけてほろ酔いかげんで山小屋に戻ってきたときには、わが家の周りには深い闇が垂れこめていて、その闇のなかに、防犯のために点灯したままのわが家だけがぼんやりと明るんでいた。われわれは懐中電燈を頼りに、でこぼこした通路をソロリソロリと進んで行った。そのとき文春の友人が「シッ、だれかがいるぞ」と小声でささやいた。私も古井さんも立ちすくんだ。そして、漆黒の闇を通して眼を凝らして見れば、たしかに食卓のあたりに人影が見える。一瞬、私は背筋が寒くなった。「あれは何者だ？」もし私ひとりであれば一目散に逃げ出して、近くの公衆電話から駅前への助けを求めたことだろう。しかし、こちらは男三人、しかも文春の友人は柔道二段の猛者である。意を決してわれわれは、上半身を伏せるようにして小さきみに歩を進めて行った。テラスのガラス戸に近づき、勇を鼓して面を上げると、食卓に座しているのはまぎれもなく松原秀一である。私は安堵の胸を撫でおろして、「松原さん？」と声をかけた。「ハイ、お邪魔しています」と家の中から涼しい声が返ってきた。

屋内に入って、彼の話聞けば、国際アーサー王学会とかで、昨夜ロンドンから羽田に着いたばかりとのことであった。そして、翌日急に荻原礫山の彫刻が見たくなり、穂高町の礫山美術館に赴き、ここまで来たならついでに白馬まで

足を延ばして若林の山小屋を探訪してやろうということに相成った次第だそうである。それなら、事前に連絡してくればいいのに、まったく人騒がせなご仁だなど恨めしく思うと同時に、今更の如くに松原秀一という人物の、他の追隨を許さぬ迅速な空間移動、意表をつく行動様式に驚嘆した。ロンドンのアーサー王学会、穂高町の碌山美術館、白馬山麓のわが山小屋、この三者は松原秀一の頭脳のなかでどのようにつながっているのだろうか、その夜の私はいぶかることしきりであった。そして、うろ憶えでしかないはずの、わが家の住所だけをたよりに、タクシー利用とはいえ、よくぞまあ道筋の定めにくい山麓の道を辿り、あやめも分かぬ闇のなかをわが家の所在を探し当てたものだと、その好奇心と執念のすごさ、考証力の卓抜さに舌を巻いたものだった。名にしおうビブリオフィルの松原秀一教授はこのようにして古文書や古書を探し当てるのであろう。

その松原さんが風の如く東京を去ってパリへ赴くという。どうかいつまでも壮健であってもらいたい。そしてまた、気が向いたらまた風の如く東京へ戻って来て、三田山上に元気な姿を見せてほしい。